

2020年東京オリンピックの跡地利用問題とその対策について

赤木大介 大室ひな 重光裕介（呉工業高等専門学校）

背景・目的

○課題

2020年東京オリンピック開催後の跡地利用方法

○目的

東京オリンピック開催後の社会システムとインフラに焦点を当てた潜在的な課題の抽出



▶ **オリンピック開催都市を訪問調査し、開催後に起こりうる課題の抽出及び対策について提案する。**

東京(2020)

※オリンピック関係者のヒアリングを実施

オリンピック施設の利用方法やインフラ計画について

■跡地利用について

- ✓多くの施設は仮設であり、大会後は解体予定
- ✓選手村は、大会後に分譲予定

■インフラ計画について

- ✓「アクセシビリティ」をテーマに掲げており、東京を訪れる全てのアクセシビリティを保証することが大きな課題
- ✓今大会のメインである「ベイエリア」は物流の大動脈
- ✓基本的な交通輸送計画は、関係者は車で運び、観客には公共交通を利用してもらう(1km以上離れればシャトルバス)
- ✓開会式の前日と当日、閉会式の当日の3日間を国民の休日にし、交通渋滞を減らす計画

▶ **計画されているが、どうなるか分からない。**

ロサンゼルス(1984)/アトランタ(1996)

■ロサンゼルス(1984)

- ～現在でも盛んに利用される施設～
- ✓大学やプロのための競技場として利用
- ✓アメリカでは大学スポーツも非常に大々的に行うため活気があった



オリンピックスタジアム



ドジャースタジアム

満足な集客/収益があるからこそ継続的な整備ができています

■アトランタ(1996)

- ～終了後は放置されたスタジアム～
- ✓本拠地としていたMLBが移転
- ✓施設の利用がなくなり、放置施設になると周辺治安低下の危険



センテニアル・オリンピックパーク

大会後の利用を考えた施設の在り方を考える必要がある

モントリオール(1976)/バンクーバー(2010)

■モントリオール(1976)

- ～屋根が特徴的なスタジアム～
- ✓オリンピックスタジアムが、現在はスポーツイベントの開催施設に
- ✓観光客が訪れる場所に



オリンピックスタジアム

市民の集まる場/観光地へと変容

■バンクーバー(2010)

- ～活気がある跡地～
- ✓オリンピックスタジアムが、現在はプロスポーツの試合会場に
- ✓選手村を一般の人向けに分譲



オリンピックスタジアム



選手村

使い手が確立されている跡地が現在の環境にとけこんでいる

ソウル(1988)/平昌(2018)

■ソウル(1988)

- ～現在の経済の中心地～
- ✓オリンピックスタジアムが、現在はスポーツイベント、コンサートの開催施設に
- ✓選手村は一般の人向けに分譲したが老朽化が懸念



選手村アパート



オリンピック公園

**市民の集まる場
地価が高騰し経済の中心地**

■平昌(2018)

- ～政府と自治体の調整続く～
- ✓多くの施設は自治体管理とする計画
 - 年間3億にのぼる維持費を自治体が負担不可能
 - 国に負担を求め、現在も衝突が続く
- ✓KTX等の交通インフラ整備
 - ソウルからのアクセス向上/観光客増



オリンピックプラザ

▶ **使い手の不在による高額な施設の維持費問題**

結論

- ・オリンピックの跡地利用について入念な計画を行い、その施設を運営・維持する団体の特定が必要
- ・交通面においては、オリンピック後も渋滞緩和や他地域からのアクセス向上につながる施策を導入

■オリンピックの跡地利用を進めるために必要な項目

- ✓プロスポーツ等による継続的な使用
- ✓活用計画に対する地域住民の合意導出
- ✓利用ニーズとデマンドの調査を確実に実施
- ✓正確な維持運営費の計算

▶ **これらの点を踏まえた上で計画を立てることで、跡地利用がスムーズにいくと考えられる。**